

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720124

研究課題名(和文) 本地物語の研究 菩薩行と誓願を視座として

研究課題名(英文) A Study of Japanese Jataka Tales: Focusing on the Bodhisattva Practices and Vows

研究代表者

箕浦 尚美 (MINOURA, Naomi)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：70449362

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：善生太子の説話と、早離・速離兄弟の説話の分析を中心に研究を行った。これらは、平安時代の日本の偽経として存在し、後のお伽草子本地物の淵源となる物語である。これらの物語の主人公は、衆生済度の誓願を立てて命を捨て仏に成る。一方、お伽草子の本地物においては、神仏となる人物の誓願に重点があるとは言いがたく、代わりに、親孝行であることや神仏に祈って生まれた子であることが、聖性の根拠となっている。その変容を論じるとともに、申し子祈願における神仏の夢告を検討した。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the tale of Prince Zensho, and the tale of Brothers Sori and Sokuri, which are found in the Japanese Buddhist apocrypha compiled in Heian Period. Because main characters in these tales vow to be reborn as Buddha to save the world, these tales are regarded as the sources of Japanese Jataka, a genre of literature called "Honji-mono" in Muro-machi Period. In those "Honji-mono" tales, Bodhisattvas' practices and vows are almost disregarded, but the filial piety and being the gifts from heaven prove their divinity instead. I made some presentations and write papers on "Honji-mono" tales and discussed at this point. And I also considered the omens for childless couples praying in the temple, commonly found in "Honji-mono".

研究分野：人文学

キーワード：本地物 お伽草子 説話 誓願 仏教 金剛寺 日本文学 中世文学

1. 研究開始当初の背景

室町時代を中心とした短編物語であるお伽草子のうち、「本地物」と呼ばれる作品群は、一般に、「主人公は神仏の申し子であるなど異常な形で人間界に生まれ、さまざまな憂悲苦悩を体験し、その憂悲苦悩から人間を救済するため、神仏の加護を得て自らも神仏に転生する」と定義される(徳田和夫氏編『お伽草子事典』(東京堂出版、2002年)「本地物」の項・大島由紀夫氏)。本地物には、神祇に関わる話と仏や菩薩に関わる話とがあるが、本研究でテーマとするのは、後者である。

登場人物が仏や菩薩に成る系統の本地物の初期の姿を考える際に、しばしば着目されるのは、『今昔物語集』巻五第二十二話(善生太子の説話)と、観音菩薩・勢至菩薩の前生譚である早離と速離の兄弟の説話である。それぞれ後に、お伽草子『阿弥陀の本地』、『日月の本地』に成長する物語である。かつて、前者の『今昔物語集』巻五第二十二話は、出典が不明でありながらも、経典を典拠として展開した本地物の典型として扱われていた(今野達「今昔物語集巻五第二十二話伝承の展開(一)―阿弥陀の本地の成立をめぐる―」(『国語(東京教育大学)』5-1, 2, 1957年)等)。しかし、実際の出典は、インド・中国撰述の経典ではなく、『大乘毘沙門功德経』という平安期に日本で撰述されたと考えられる偽経であることが現在では知られている(牧田諦亮・落合俊典、七寺古逸経典研究叢書四『中国日本撰述経典(其之四)・漢訳経典』、大東出版社、1999年)。早離・速離の物語も、『観世音往生浄土本縁経』という名の同様の偽経による。物語の主要部分が仏菩薩の前世の話であるという構造は、インド撰述経典にも多く存在する(本生経、jataka)が、室町時代に花開くお伽草子「本地物」に直接つながる経典は、これらの偽経だったのである。

本研究に入る前提研究として、科学研究費による助成を受けて、若手研究(B)「新出孝養説話集の研究」(課題番号 19720051, 2007~2009年度)を行ってきた。同研究は、新出の説話集(13世紀頃写)である金剛寺蔵(佚名孝養説話集)を中心に、説話と偽経の関係を考察したものである。所収説話は、いずれも、天竺を舞台とし、幼くして親を亡くした子供が、残された家族とともに苦勞をしながら生きていくという型の物語で、釈迦や仏弟子などの前世の話として結ばれている。すべて経典名を挙げて典拠が示されているが、それらのうち、実際に経典が存在するのは、上掲の『観世音菩薩往生浄土本縁経』の説話のみである。説話の内容と語句の分析によって、これらの説話は日本で作られた物であると結論した。その特徴としては、以下の点が指摘できる。

- ①初期仏教における本生経(jataka)と同様の構成を持つ短編の物語である。
- ②しかし、本生経のような単純な転生の繰り返しではない。
- ③その内容は、主人公の苦難をテーマとして誓願を立てて(説話によっては捨身して)転生するものであり、
- ④『法華経』『金光明経』『悲華経』等の大乘仏典において菩薩の過酷な捨身的行為が強調される「長編の」過去の因縁物語(pūrvayoga)の影響が考えられる。
- ⑤物語は家族の関係が重視されている。

これらの特徴は、本書所収説話のみならず、『大乘毘沙門功德経』や『観世音菩薩往生浄土本縁経』にも共通し、インド・中国撰述経典の説話とは区別されるべき日本の初期本地物語の性格として捉えることができる。それは、当時の信仰の反映であり、具体的には、『法華経』『金光明経』などを通した利他行を重視する菩薩行と誓願観を踏まえていると考える。

2. 研究の目的

前述のように、中世の信仰を色濃く反映するお伽草子「本地物」のうち、仏や菩薩の前世を描いた『阿弥陀の本地』や『日月の本地』などの原形は、平安中期に撰述された偽経として存在しているが、その成立には、既存の物語(経典)には満足しなかった人々の要求があり、新たな物語には、当時の菩薩行や誓願観が反映されたと考えられる。本研究の目的は、まず、その思想的背景を意識してこれらの物語を読み解くことである。次に、主人公の苦難と転生がテーマである室町期の「本地物」について、菩薩行や誓願の視点からの見直しを図る。平安期と室町期では、菩薩行の実践に対する意識に差があり、同じ論理では説明できないと予測される。その共通点と差異によって、中世の本地物語の構造を解明する。

3. 研究の方法

金剛寺蔵(佚名孝養説話集)の研究により、平安期(法然以前)の菩薩行や誓願が、中世とは異なっていること、そして、恐らく、そのことが、平安期の本地物語の誕生に影響を与えていることがほの見えてきた。従って、それを確実なものとするために、『大乘毘沙門功德経』『観世音菩薩往生浄土本縁経』などの平安期本地物語の分析と、周辺文献の検討を行っていく。当時の菩薩観の把握については、従来知られていた文献の検討の他、金剛寺蔵『百願修持観』、同蔵(佚名諸菩薩感応抄)も考察対象とする。菩薩観を視座とした本地物の考察自体、これまでほとんど行われていなかったと思われるが、従来知られていた資料にこれらを加えて検討することに

より、本地物における誓願の意味を具体的なものとして浮かび上がらせる。

(1) 平安期における菩薩行・誓願観の把握

仏菩薩の前生物語として描かれる本地物語の思想把握のために特に重要なのは、菩薩行と誓願であり、注目されるのは、千観(918-983)『十願発心記』や源信(942-1017)『往生要集』などに見られる菩薩行の実践である。そこには、自らが厳しい菩薩行を行って浄土に行くことによって衆生を救うという願が誓われているが、例えば、『法華験記』にも『法華経』薬王品に倣って焼身自殺を図る者の話などがあり、このような自己犠牲を伴う菩薩行は、平安期の本地物語の姿勢と共通していると言える。自らを菩薩に見立てて、普賢菩薩や法蔵菩薩等と同じ内容と数の誓願を立てた作者不明の作品として、金剛寺所蔵『百願修持観』(平安後期写)という文献を指摘できる(箕浦尚美「金剛寺蔵『百願修持観』影印・訓読文・略解題」(科研費基盤研究(B)『真言密教寺院に伝わる典籍の学際的調査・研究—金剛寺本を中心に—』(中間報告書)、代表後藤昭雄、2009年)。平安末期以降は、法然(1133-1212)等による称名念仏・他力往生が急速に勢力を増してくるため、このような真剣な誓願は、『百願修持観』の頃が最終と考えられる。従って、凡そその時期までについて、実践的菩薩道の概念が、仏教説話、乃至は文学作品にどのような影響を与えているのかを検討する。同時に、『大乘毘沙門功德経』『観世音往生浄土本縁経』の分析からもその思想を明らかにする。

(2) 菩薩行・誓願を視座とした、お伽草子「本地物」の分析

平安期に生まれた本地物語は、後代、『神道集』や、お伽草子「本地物」として噴出する。その時代の誓願の概念は、平安中期のような実践的な菩薩行とは異なっていたはずであるが、それにもかかわらず同じ話型の作品として編まれたことに着目して、「本地物」の構造を分析する。

(3) 寺院資料の調査・研究

後藤昭雄氏を代表とする金剛寺聖教共同調査研究(「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究—聖教の形成と伝播把握を基軸として」(科研費基盤研究(B)23320054代表・後藤昭雄)に研究協力者(2011-2013年度)・研究分担者(2014年度)として参加し、調査を通じて寺院の蔵書構成を把握するとともに、菩薩行や誓願観にかかわる文献(『百願修持観』、〈佚名諸菩薩感応抄〉、〈佚名孝養説話集〉、『捌釈』等)を中心に調査・研究した。また、七寺蔵『大乘毘沙門功德経』についても国際

仏教学大学院大学・落合俊典氏を代表とする調査団の調査に参加し、原本調査の機会を得た。

4. 研究成果

主に以下の研究成果を得た。

(1) 本地物語における誓願と捨身
善生太子説話(『大乘毘沙門功德経』、『今昔物語集』5-22、『阿弥陀の本地』)、及び、早離・速離説話(『観世音菩薩往生浄土本縁経』、『日月の本地』)の検討を主要テーマと考え、その研究を中心に行った。

早離・速離の兄弟の話は、阿弥陀の三尊の由来譚でもある。兄弟は継母の策略によって餓死することになるが、死に臨んで衆生済度の誓願を立て、その悲願によって観音菩薩と勢至菩薩になる。父親は子供達を思って五百願を誓って捨身し、釈迦になる。命を惜しまず死んでしまう姿は、大乘経典の菩薩行と同じである。

善生太子の物語も同様である。『今昔物語集』巻五第二十二話や青蓮院本『大乘毘沙門功德経』では、「命ヲ捨ツ」としか書かれておらず、菩薩や諸天に転生する理由が曖昧であるが、七寺本『大乘毘沙門功德経』には、悲しみにより発心し誓願して身を捨てたことが書かれている。

これらの物語が成立した平安期には、実際に捨身が行われることもあった。捨身は自らが利他の誓願を立てて浄土に行くことで衆生を救うという考えに基づくものである。

仏や菩薩の前生物語は、『私聚百因縁集』など様々な説話集やお伽草子などに見られるが、各物語には、誓願や捨身への視点の濃淡がある。例えば、仏に成らずに現世の栄花で話が終わるもの、誓願による成仏ではなく単なる極楽往生を述べるもの、などである。菩薩行が近いものであった時代を経て、追善供養や念仏が重視されることが、仏に成る物語の構造にも影響を与えていったと思われる。他力に頼る俗世の人々にとっては、自分が極楽往生することによって他の衆生を救うという考えが理解されにくくなり、誓願が省略される。そのことによって、主人公が仏になる理由付けが別途必要になり、例えば、早離・速離が、親孝行を理由に菩薩になるというような形に、変化したと考えられる。その変容について、論文を執筆するとともに、北京(精華大学)での国際シンポジウムにおいて、口頭発表を行った。

(2) 金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉の研究
金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉は、菩薩に関する経文と感応譚を抄出集成した平安末期の列帖装の冊子(現存110丁)である。はじめに菩薩の概要を述べ、続いて、文殊、普

賢、観世音の順に、各菩薩に関する経文と感応譚が集められている。感応譚の部分に佚文を含む多数の希少な文献が利用されていることが、先行研究によって指摘されている（後藤昭雄「金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉所引『観世音感応記』佚文」〔『大阪大学文学部紀要 39、1999年3月〕他）。

本研究では、経文類聚部に着目して内容と編纂方法を検討し、主に以下の見解を得た。

- ・経文類聚部にも『観音三昧経』『千臂千眼観世音菩薩呪経』（古写本系本文）などの希少な本文が含まれる。
- ・各篇はいずれも丁の表から書き始められているが、篇の末尾等に余白が設けられている。後に要文や感応譚を追記するために設けたものと推測される。
- ・経文の抄出と感応譚は、文殊菩薩、普賢菩薩、観世音菩薩、（付 勢至菩薩）の順に記されるが、その配列は、釈迦三尊・阿弥陀三尊の脇侍の順と考えられる。
- ・経文類聚部は、各菩薩の感応部の前に位置し、自らの菩薩行の実践を促すものよりも、信仰対象となる菩薩の靈験にかかわるものが多い。陀羅尼の功德や観音菩薩の形に関するものなどである。

これらについては、北京人民大学で開催された「仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム—」において報告した。

（3）お伽草子「申し子」譚における夢告

（1）に記したように、お伽草子の本地物は誓願を伴わないものが多い。一方で、多くの主人公は、神仏の申し子として生まれている。申し子がすべて神仏になるわけではないが、衆生済度の誓願に代わって、申し子という型によって聖性を与えることが、仏に成る有力な理由となったと考えられる。

その申し子譚には、神仏からの夢告がある。お伽草子では、子種がないと告げられた場合には、神を脅してでも得ようとする。前代にはなかったそうした応酬の肥大化は、成仏・成神の理由を申し子に求めた結果とも思われる。

そこで、過去世の殺生や恨みによって子宝に恵まれないという夢告についても検討を加えた。例えば、『浄瑠璃御前物語』、『千手女物語』、『大仏の御縁起』などに見られる夢告で、「驚であった過去世で、法華経を聴いたために人となることができたが、鳥を食ったために子種がない」などという話である。このような型は、法華経の靈験譚に、多く見られる。例えば、ある僧侶が経典のある特定部分を覚えられない理由は、前世に動物だったときにその文字を食ったため（『大日本国法華経験記』第 78）、その巻を聞けなかった

ため（同第 77, 89, 93）、などと説かれている。

これらの靈験譚の場合と比較し、申し子譚における過去世の夢告の構造を論じ、口頭発表を行った。前世の業のために子が無いという理不尽な理由は非難されず、神仏への強い祈りのエネルギーへと変換される。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①箕浦 尚美、早離・速離（観音・勢至）の菩薩行—初期本地物を考えるために—、語文（大阪大学）、査読有、100・101 輯、2013、pp. 63-74

〔学会発表〕（計 5 件）

①箕浦 尚美、お伽草子のお告げ—『天狗の内裏』における過去・未来の告知から—、第 47 回国際日本文化研究センター国際研究集会「夢と表象—その国際的・学際的研究展開の可能性」、2015 年 3 月 1 日、国際日本文化研究センター（京都市）

②箕浦 尚美、金剛寺蔵〈佚名諸菩薩感応抄〉の編纂方法—観世音菩薩篇の経文類聚に着目して—、仏教と文学—日本金剛寺仏教典籍調査研究成果報告国際学術シンポジウム—、2014 年 10 月 25 日、中国人民大学、北京（中国）

③箕浦 尚美、早離速離説話（観世音菩薩前生譚）における誓願と孝養、国際シンポジウム「東アジアにおける孝の文化」（孝文化在東亞地域的傳播和發展 国際研討會）、2013 年 11 月 2 日、清華大学、中国（北京）

④箕浦 尚美、本地物語における申し子譚の位相、国際日本文化研究センター共同研究「夢と表象—メディア・歴史・文化」（代表・荒木浩）平成 23 年度第 5 回共同研究会、2012 年 1 月 21 日、国際日本文化研究センター（京都市）

⑤箕浦尚美、聖教の書写—金剛寺聖教の奥書について—、「金剛寺所蔵典籍の集約的調査と研究—聖教の形成と伝播把握を基軸として」（科研費基盤研究（B）23320054 代表・後藤昭雄）平成 23 年度研究会、2012 年 2 月 27 日、京都国立博物館（京都市）

〔図書〕（計 1 件）

①鄭阿財、今西順吉、高田時雄、落合俊典、他 19 名、仏光文化事業有限公司（台湾）、仏教文献与文学（仏光文選叢書 5520）、2011 年、全 694 頁
執筆箇所：箕浦 尚美、《百願修持観》之誓願観、pp. 133-161

6. 研究組織

(1) 研究代表者

箕浦 尚美 (MINOURA, Naomi)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：70449362